

超人ベータマンの最期

ほしみこうへい

シーン01

千葉県のパアン測候所が生物性の地震微動を観測したのはその日朝早くのことだった。

そのデータはNTTの高速デジタル回線を経由して直ちに気象庁の防災情報センターに転送され、そこからさらに総理府管轄の生物災害特別対策本部へと送られた。

四直二十四時間態勢で機能する生物災害特別対策本部は気象庁よりの連絡を受けると同時に陸上、海上、航空の各自衛隊幕僚部、在日米軍、地球防衛軍極東方面軍それぞれの司令部、科学技術庁付属の生物災害研究所などの諸機関と連携して協議を開始、生物性微動観測から二時間二十分後の同日午前十一時十分、臨時生物災害情報を発表した。

俗に言う“怪獣注意報”である。

その後さらに、千葉県の市川市、東京の江東区でも同様の地震微動が観測され、第二回、第三回の災害情報が続けて発表された。

午後一時、生物災害特別対策本部はついに地域防災対策特別法に規定された生物災害警報……“怪獣警報”を首都圏全域に対して発令した。

が、定期観測飛行中だった海上保安庁所属のS-17対地観測機が浦安沖の東京湾にテストドローン型の巨大生物を発見したのはそのわずか七分後のことであった。

発見されたテストドローン型生物は直ちに《イルブロン》と命名され、生物災害特別対策本部と連携関係にある各軍に、このイルブロンを排除すべく出動命令が発された。

シーン02

富士基地から弾道軌道でスクランブルした地球防衛軍の対地殺獣攻撃機AK-47《ナイトホーク》四機がイルブロンに対して攻撃を開始した頃、参議院議員・岬誠吾の姿は国会議員会館の彼の部屋に見いだすことができた。

誠吾は四十四歳。議員二期目で自由共栄党政務調査会委員、経済産業省政務次官補という肩書きを持った政治家である。

その彼は電話に向かって、咬みつかんばかりに叫んでいた。

「それで、やつの予想進路は？ またディズニーランドか。あそこはこの間のディゲレゴンの被害からやっと復旧して、営業を再開したばかりだろう？ 米商務省のコズレフ次官あたりは『日本の怪獣は実は日本企業が飼い慣らしているんじゃないか』なんて嫌みを言ってるんだぞ。どうにかして、被害を防げないのか。本部の方針はどうなんだ？ ……ふん。……ふん。それで？」

電話の向こうの統合幕僚本部参謀官の言葉は一向に的を得ない。

「いや、だからだな……」

苛立った誠吾が怒鳴ろうとした、まさにそのとき。

「先生、党本部の田池先生からお電話です」

第二秘書の狭島志穂がドアの隙間から顔を見せて、言った。

彼女はバツイチの三十二歳ながら、誠吾の片腕としてなくてはならない才女である。

「悪いが、ほかから電話がかかってきたようだ。また後で、こちらから連絡する。それじゃ」

誠吾は左手を軽く挙げただけで志穂に了解の意を示し、多機能ビジネスフォンの回線ボタンを切り替えた。

「はい、代わりました。岬です」

今度の相手は与党、自由共栄党の政務調査会長、田池郷太郎である。

田池はあいさつ抜きに、いきなり用件を告げた。

『ああ、岬くんかね。田池だ。本会議の審議再開の件だが、楠くんの骨折りで、やっと民自や共も再開に応じてくれそうな気配でね。そこで折りいって頼みたいのだが、きみの方からも独自のチャンネルで接触してみてくださいるか』

田池の言う“楠くん”とは、自由共栄党の国会対策委員長を務める楠正之助のことだろう。

誠吾は言った。

「あの……。突然“独自のチャンネル”と申されましても……」

『とぼけなくてもいいだろう。自衛隊出身のきみのことだ。つてはいくらでもあると思うが』

決めつけるような田池の口調に、誠吾は嫌な汗をかき出した掌で受話器を持ち直した。

「田池先生。前にも申し上げたはずです。わたしは防衛出身とは言え、防衛産業協力会の連中には嫌われてましてね。共和あたりの防衛族議員とはあまり……」

『わたしが言っているのは民自の金城くんのことだよ。きみと同じ派閥の岸野くんから聞いたが、彼とは地球防衛軍への出向の時に同じ部隊だったそうじゃないか』

「確かに、金城とは同じSATのメンバーだったこともありますがね……」

田池の言葉に、誠吾は言い淀んだ。

S A TとはSpetial Attack Teamの略で、地球防衛軍極東方面軍内に特設された対怪獣戦向けエリート部隊のことである。

元自衛官の誠吾はかつて地球防衛軍に出向していたことがあり、そのとき、このS A Tに所属していた。

そして、そのS A T時代にチームメンバーの一人だった金城鉄春は今、野党・民主自由クラブの若手派議員の会“わかとり会”の副会長となっていた。

『まあ“怪獣との共存”などというばかげた政策を掲げた民自の議員と会うのは、昔の同僚とは言え気がすすまんかも知れんが、なに、これも我が党のためだ。ぜひとも頼む』

「はあ……」

誠吾の歯切れの悪い返事を、田池は了解ととったらしかった。

『金城くんは今、議員控え室らしいよ。両院議員総会のための前交渉をやっているらしい』

「わかりました。とりあえず、金城と会うだけ会ってみましょう」

残念ながら、議員二期目のひよっこに党の重鎮からの依頼を断る術はない。

『いい結果が出ることを祈っとるよ』

受話器を置いてから、誠吾は深いため息を一つついた。

「いい結果、だって？ なに暢気なことを言っているんだ。すぐそこまで怪獣がやってきてるってのに」

シーン03

誠吾が議員会館から議事堂へと向かった頃、浦安では地球防衛軍、自衛隊、在日米軍からなる混成部隊が怪獣イルブロンを相手に苦戦に陥っていた。

イルブロンを迎え撃ったのは地球防衛軍のAK-47《ナイトホーク》攻撃機五機、航空自衛隊のFJ-16FSX2《ジーニアスファルコン》戦闘機六機、米軍のHA-18K《ハンターホーネット》攻撃機四機、都合十五機を主力とする航空部隊と、陸上自衛隊の二二式メーザー殺獣戦車三両を中心とする地上兵力およそ一個師団である。

これに対するイルブロンは全長五十五メートル、推定重量三万トンという巨大な四足歩行型の巨大生物だった。このスペックは既知のテストドロン型生物としては中型に属する。

そして、テストドロン型巨大生物の例に漏れず、イルブロンは亀の甲に似た頑丈な甲殻と三つの長い首を持っており、その首の先端にある分泌腺から鉄をも溶かす強烈な溶解液を噴出させる性質を持っていた。

『こちら、キング2。やつの溶解液のために左エンジンが溶けちゃった。これから、機首を海に向けて、機体から脱出する。燃料を投棄する余裕がない。機体が墜落する可能性がある付近の住民の避難を確認して……』

『こちらジョーカー3だ。ミサイルと爆弾を使い果たした。これより、機銃による支援攻撃にまわる』

『司令部よりエース1、2、3各機へ。やつは海沿いに東京方向へ向かっている。キング、ジョーカー各機と連携して、やつの進行方向をなんとかして変えさせてくれ』

『司令部、こちら二号メーザー車。路上に乗り捨てられた住民の自動車のために、指示された道は通れない。新たな指示を乞う。現在位置は……』

『うわ〜っ！ お、俺の脚が……。俺の脚が溶けちゃう！ たた、助けてくれえっ！』

『司令部、こちらキング1。ターゲットの北五百メートルの路上に逃げ遅れた住民三名の姿を確認した。地上部隊に救助に向かうよう指示してくれ』

レーザーから聞こえてくる混乱した通信を耳にしながら、星野和文は絶望感に捕らわれていた。

破壊と殺戮の限りを尽くしている眼下の怪獣を見おろして、うめく。

「くそう。まるで歯がたたないじゃないか」

SAT隊員である彼が身を置いていたのはAK-47殺獣攻撃機のコックピットだった。

AK-47《ナイトホーク》は地球防衛軍の誇る最新鋭の単座亜音速攻撃機である。

三菱重工製のSF-1003熱核ジェットエンジン二基に日立電工謹製のHR-61/2電磁レールガン二門、そして東芝・日本電気共同開発のILB-201B荷電粒子線砲一門と純国産のハイテク兵器が満載である。調達費用が一機当たり二十億円近い機体は“武器輸出禁止”を標榜する日本政府との協約によって、日本の領土・領海内でしか運用を許されていない。

しかし、その最新兵器を駆使しても、彼は巨大怪獣の行き足を停めることすらできないでいた。

和文はすでに多重投影式のHUD（ヘッドアップディスプレイ）で踊るレティクル（照準）マ

ークを操り、接触式バレルレールの砲身命数が尽きるまで超電導セラミック製の弾体を乱射している。そして、三次の熱交換機でジェット噴流を生み出している熱核融合炉の炉心から直接誘導した荷電粒子を電磁集束して、続けざまにたたきつけていた。

しかし、その怒涛の攻撃を受けていながら、イルブロンは平然と市街地の破壊を続けていた。

そもそも、怪獣と俗称される巨大生物には、従来の生物学の常識など通用しないのだった。

彼らは珪素と重金属を重合結晶させたハニカム構造の骨格を持ち、化学反応より強力な重力ポテンシャル反応をその生命活動の源にしていた。その出自の大半こそ人間がばらまいた汚染物質による突然変異だったが、やつらはもはや人間を始めとする生き物たちと基本的な性質を異にする、文字通りの“怪物”だったのだ。

「愚痴ってても、しょうがないか」

ため息を一つつくと、和文はVHFの軍用回線で、米軍のHA-18Kを呼び出した。

HA-18K《ハンターホーネット》は名前こそ原型機であるF/A-18戦闘攻撃機と似ていたが、エンジンを水素燃料系のR&R社製HS-2000に換装し、電子兵装を一新した対怪獣戦の専用機だった。機種識別符号であるHAは殺獣攻撃機(ハンター・アタッカー)を意味する。

「エース1、ジャクソン。こちら、キング4、ホシノだ。やつの背中にもう一度ピンポイント攻撃をかけたい。援護してもらえるか」

『おう、了解した。あの三つ首のカメ野郎に、世界中で実績のあるメイド・インUSAの爆弾をたらふく食らわせてやるぜ!』

僚機との連携を確認して、和文はフライ・バイ・ライト式のスティックを思い切りひねった。逆ガル翼を持ったAK-47の機体が大きくロールを打った。

議事堂前に、プラカードの波が揺れていた。

怪獣出現で首都圏全域に外出制限令が出されているはずなのだが、大通りはデモ隊の群衆と、それとにらみ合う機動隊員とで埋め尽くされている。

党本部差し回しのトコタ・ミレニアムセダンの窓からその景色を見て、誠吾は嘆息した。

「やれやれ。またあの連中か」

半世紀前から変わらないヘルメットにタオルでマスク姿のデモ隊がシュプレヒコールで氣勢を上げている。

「かわいい怪獣たちを殺すなァっ！」

「地球防衛軍の駐留は憲法違反だァっ！」

「怪獣たちとわれわれの生活を脅かす怪獣関連四法案、断固粉碎っ！」

「おーっ！」

半ば暴徒に近い群衆が掲げた大時代な筵旗には、いかにも手描きくさいGGCの3文字がのたくっている。デモ隊の主力は、またしてもガーディアンズ・オヴ・ジャイアンティック・クリチャーズを名乗る過激な環境保護団体らしかった。

彼らは巨大な体格に比例して発達した中枢神経系を持ち、さらには高度な知性すら有するはずの怪獣たちを無条件に保護することを求めていた。そして、その目的のためにはテロすら辞さない過激な行動を続けていた。

彼らは“生き物はほかの生き物を殺すことによるのみ生存できる”という基本的かつ普遍的な事実を理解しようとしないう“博愛主義者”の一派だったのである。

己が教条のみしか存在を認めない狭量な狂信者ほど手に負えないのは人類の歴史が始まって以来変わらない不変の真実であろう。

機動隊とSPの先導で交通規制の中をのろのろと進みながら、誠吾は軽いめまいを覚えていた。

「『かわいい怪獣』だと？ 汚染物質を垂れ流しにして、その“かわいい怪獣”を創り出したのはどこのどいつだというつもりなんだ？ 憲法違反の地球防衛軍の基地を誘致するために、大挙して陳情にきたのはどこのどいつだってんだ？」

“つきあってられない”とでも言いたげに、彼は持っていたファイルを隣りの志穂に渡した。

「予想被害総額の数字については、わかったよ。それで、復旧のための予算について、施設局の連中はどう言っているんだ？」

「予備費の取り崩しには限度があるので、できれば補正予算を計上したい腹らしいのですけれど」

「財務省の連中はそんなに甘かないよ。どうせ防衛省の制服組がまたぞろ“自衛隊にもナイトホークを配備すべきだ”とかなんとか言い出すだろうしね」

「それでは、予算は？」

「防災対策基盤整備事業の方にしわ寄せするしかないだろうな。都市部の沿岸に設置する予定だった早期警戒センサー群辺りが最初の槍玉に上げられるだろう。やれやれ。あの予算をぶん取る

ためにどれだけ苦労したとか。徒労ってのはこのことだよ」

誠吾が天井を仰いでみせたとき、ミレニウムセダンがようやく議事堂の車寄せに到着した。

シーン05

『ホシノ、娘のジェニファーに伝えてくれ。“パパは最後まで男らしく勇敢に戦って死んだ”
とな……』

空電ノイズに混じって、うめくようなアリゾナなまりが聞こえた。

「ジャクソン！」

和文が叫んだとき、彼の視界の隅でHA - 18Kの機体が粉々に爆散した。まっぴたつに折れた機体に残っていた五百キロ爆弾が派手に誘爆する

「くそっ！」

和文は血走った目を眼下のイルブロンに向けた。

海岸沿いの工業地帯を破壊し尽くした巨大な生物は悠然と都心方向へと向かっていた。

イルブロンの進行方向に当たる地域ではすでに住民の避難が終わり、陸上自衛隊と地球防衛軍地上部隊からなる最終防衛線が待ち受けているはずである。

しかし、和文にはそれがひどく無駄なことのよう思えた。

彼自身の搭乗するAK - 47もすでに電磁レールガンの弾体を撃ち尽くし、荷電粒子線砲も砲身が過熱状態にあった。

「……だめだ。地球人が相手するには、やつは強すぎる……」

熱核融合炉用の二次冷却剤残量が僅かなのを確認して、和文は機体にロールを打たせた。

「……やはり変身するしかないのか」

低く呟きながら、高々度から一気に逆さ落として機体を急降下させる。

「たりゃーっ！」

スティック中央のトリガーを引く。

機首にマウントされた三十ミリ多砲身バルカン砲が火を吹いた。

イルブロンの背中に、縫い取りのように着弾点が走る。

三つあるイルブロンの首のうちの一つが急接近するAK - 47を向いた。

イルブロンと目が合った瞬間、パイロット席の和文は右手首にはめたブレスレットを胸の前に構え、叫んでいた。

「イオタ・スパークっ！」

同時に、イルブロンの溶解液がAK - 47を襲った。

強酸性の液体がハイテクの塊である機体を瞬時に溶解し、それに破滅的な破壊を及ぼしたのは和文の予想より、ほんの一瞬だけ早かった。

シーン06

議員控え室に向かうために赤い絨毯のひかれた階段を上っていた誠吾は奇妙な感覚を覚えて、思わず立ち止まった。

そのとき。

“イオタマンが変身に失敗したようだな”

耳で聞いたのとは違う“声”が直接、誠吾の意識に響いた。

慌てて振り返る。

誠吾の視線を弾いたのは日本共和国の参議院議員、加瀬敏夫だった。野党の大物である。

彼もまた登院の途上のようなようだった。

「やあ、加瀬先生。あなたはシェルターに避難しないんですか」

口では暢気そうに言いながら、誠吾は思念の形で激しい言葉を加瀬にたたきつけていた。

“星野が失敗したのがひどく嬉しそうだな。ナグア・パレ・クオー”

パレ・クオーとは、地球人の知らない言語で執政政務官を意味する。しかも、それは独裁者に近い揶揄のニュアンスを含んだ表現だった。

「岬先生も何を仰っているのやら。シェルターに避難しないでもいいように、国会審議を再開して、事態の打開策を協議しなければならんわけですからな」

加瀬も一見穏やかに答えていながら、その笑みには剣呑なものがほの見える。

“お前たち《地球人の味方》を名乗る偽善者どもがやらかす失敗はとても滑稽なのでね”

逆に、これまた揶揄に満ちた思念を送り返してくる。

実は、加瀬は地球人ではなかった。

太陽系を離れること約五十光年、エリダヌス座β星を巡る惑星ナグアを故郷とするナグア星人がその正体である。

しかし、そのことを知っているのはほんのわずかだった。世間一般には、彼は理論派で伶俐な切れ者議員としてのみ知られている。

それほど巧妙に彼は“地球人としての加瀬敏夫”に化け、それを演じていた。

“偽善者だと？ きさまたち侵略者にそうは言われたくないな”

誠吾の思念に、加瀬は唇の端を歪めた。

“侵略者とは、その表現こそ心外だな。愚かな地球人どもは口でこそ民主主義などとほざいているが、心の奥底では、優れた為政者に支配されたがっているのだよ。だから、われわれナグア星人が穏便に支配してやろうというのだ。金権にまみれた地球の政治家より、異星人であるわたしの方がよっぽど清廉潔白で誠実な政治活動を行っているのはお前も認めるところだろう。これのが侵略だということかね？ ベータマン”

“お互いの妥協点は永遠に見つかりそうにないな。ナグアの執政官”

加瀬の思念に、誠吾は苦笑した。

そう、実は岬誠吾もその正体は生粋の地球人ではなかった。彼は太陽系から遥か百二十光年離れたぎょしゃ座θ星の惑星ディアからやってきた宇宙人ベータマンだったのである。

怪獣スラオドンと戦って瀕死の重傷を負ったSAT隊員・岬誠吾はベータマンと生命を融合さ

せることによって無敵の超人として甦ったのだ。

彼はかつて身長四十メートル、体重二万五千トンの深紅の巨人に変身し、幾多の怪獣たちと戦った。

しかし、それはもう過去のことだった。

十年に及ぶ過酷な戦いは強靱を誇ったベータマンの身体を蝕み、その命をかんなのように削り取っていたのである。

八年前、重傷を負ったのを機に彼は引退し、地球の守護者の座を後輩の超人たちに譲った。

だが、彼は地球人・岬誠吾としての活動は続けていた。

地球人が自分たちで怪獣を撃退し、いつの日か自力で怪獣問題を乗り越えてゆけることを信じて、“地球人としてできること”に挑戦を続けていたのである。

そして、それが国会議員として国家の怪獣対策に参画していくことだった。

“お前との妥協点など、見つけたいとも思わんよ。だが、ある意味では、わたしもまた地球を愛しているのだ。『自らが支配する領地惑星』としてだがね”

捨てせりふに似た思念を残して、ナグア星人・加瀬敏夫は野党議員の控え室へと去っていった。

誠吾はその背中を、無言のまま見送った。

シーン07

「カズ！ カズ！」

自分を呼ぶ声に、和文の意識はゆっくりと無意識の闇の中から浮かび上がった。

鉛のように重い瞼を無理矢理こじ開ける。

ぼんやりと、自分の胸にすがりついた看護婦姿の女の子の姿が見えた。

「よお、ヨーコ」

いつものように抱き寄せようとして、顔をしかめる。右半身に信じられないくらいの激痛が走ったのだ。

「……カズ？ よかった！ 意識が戻ったのね」

涙に濡れた顔を喜色に輝かせて、峰岸陽子が和文の首に抱きついた。

「よかった。本当によかった。カズがもう永遠に帰ってこないような気がして、あたし、あたし……」

絶句してしまった彼女の背中を、和文は左手でそっと撫でてやった。

「大丈夫だ。おれはもう大丈夫だよ。心配させてすまなかった」

陽子は地球防衛軍SAT所属の看護兵だった。

そして、和文の恋人でもあった。

自分が寝かされているのは、どうやら野戦用のテントの中のようなようである。

「それより、俺の右手は……」

和文は包帯で手荒くぐるぐる巻きにされた自分の右腕を見た。

少しでも動かすと、信じられないほどの激痛が走る。

陽子が言った。

「まだ動かしちゃだめよ。カズはイルブロン溶解液を浴びたの。右腕は骨がのぞくほど溶けてたんだから」

「それじゃ、俺のスパーク・レットは……」

勢い込んで問おうとして、和文は絶句した。

陽子はスパーク・レットの秘密を知らないのだ。

彼女は愛するカズがスパーク・レットと呼ばれるブレスレットとキーワードによって、銀色の超人イオタマンに変身することを知らなかったのである。

「俺の何がどうしたの？」

「い、いや、なんでもない」

和文は動揺を隠すために、話題を変えた。

「それより、やつは、イルブロンはどうした？」

「怪獣はまっすぐ都心に向かってるわ。カズの身体と同じで、あいつが通った後の町もひどいものよ。今日に限って、どうしてイオタマンが現れないのかしら」

陽子の言葉に、和文は腕の痛みより深い胸の痛みを覚えた。

“冗談じゃないぞ。今の地球には、引退したベータマンの他には、この俺しか居ないってのに”

シーン08

「正体もわからん謎の巨人に結果的に頼ってしまっている現在の対怪獣防衛体制に根本的な問題があることはわたしも了解しているさ。しかしだね、きみの党が提案しているみたいに、怪獣の出現が頻発している地域を特に指定して、その地域に対してのみ防災・復興面での優遇措置を取るってのは決して容認できる政策じゃないよ」

「その辺は、わたしも党本部の施策に百パーセント賛成じゃないさ。でもな、予算的にも、資源的にも選択可能な選択肢は限られているわけだし……」

「選択肢として選ばれなかったという理由だけで置き去りにされる地域住民の立場はどうなるんだ？」

「いや、金城。だからだなァ……」

誠吾は議員控え室の片隅でかれこれ二十分近くも金城鉄春と押し問答を続けていた。

「だからもクソもないよ。わたしはどうあってもきみの党の怪獣関連四法案を容認する訳にはいかないね」

「本会議の審議再開には応じられない……か」

にべもない金城の様子に、誠吾は途方に暮れた。

と、そのとき。

「あの、先生」

秘書の志穂が控え室から廊下に通じるドアから顔を見せた。

「どうした？」

「あの……。奥さまからお電話なのですけれど」

「雅子から？」

一瞬、怪訝な表情を見せた後、誠吾は座を立った。

「ちょっと、失礼」

議員控え室を横断する間、誠吾は少し左脚を引きずるようにして歩いた。

彼は脚が少々不自由なのである。その理由はSAT隊員時代に負った負傷であるとされていた

。

控え室の片隅に設けられた電話機のブースに入る。生物災害警報が発令されてから、都内では携帯電話の使用に厳しい制限が設けられ、事実上使用できない状態が続いていた。

「もしもし？ 俺だ」

『もしもし？ わたしです。ああ、よかった。お元気そうな声で』

受話器から妻の声を聞きながら、誠吾はふと、

“そういえば、雅子とずいぶん会っていないな”

などと思った。

地方区選出の誠吾の自宅は出身地の鳥取にあるのだ。

「急に電話なんかかけてきて、いったいどうしたんだ？ 地元後援会の方でまたごたごたでも起こったのか？」

『いいえ。テレビのニュースで、また怪獣が現れたと言っていましたから、あなたのことが心

配で……』

「そんなことで、いちいち電話してきたのか！」

強い調子で言ってしまうから、誠吾は自分の言葉に後悔した。

案の定、電話の向こうから聞こえてくる声はそれとはっきりわかるほどか細くなっていた。

『……申し訳ありません。怪獣の出現は決して珍しいことではないですし、国会の審議期間中であなたがお忙しいのもわかっていたのですけれど、おかあさまがあなたのことをとても心配なさって……』

「その……、こちらこそすまん。ここしばらく審議が空転しているんで、いらついていたんだ。あたって、悪かった」

『いえ、そんな……』

電話回線をはさんで、夫婦の間に冷たい沈黙が落ちた。

誠吾は承知していた。

夫婦の間に子供がないために、姑……つまりは誠吾の母が彼女に冷たくあたっていることを。

そして、子供がないのは妻・雅子のせいではなく、夫である自分の側にその理由があることを

。ベータマンとして生まれ変わる寸前、岬誠吾の肉体はいったん完全に死滅していた。

そして、異星人との組織融合によって蘇生した後も、彼の生殖腺の機能は永遠に失われていた

。そう、彼女の現在の不遇はすべて誠吾に起因していたのである。

「わたしのことなら、心配は要らないよ。永田町の避難シェルターが国内でも最高ランクの安全計数がとってあるのはお前も知っているだろう？」

できるだけ優しい声をかけてやる。

『くれぐれも気をつけてくださいね』

「ああ、わかった。後で、またこちらから電話するよ」

『それじゃ』

「ああ、それじゃまた」

妻が名残惜しげに受話器を置く音が聞こえた。

「……ふう」

肩の力を抜いて、深く息をする。

誠吾はまだ妻を愛してはいたが、その存在は徐々に彼にとって重荷になりつつあった。

無言のままブースを出る。

「奥さま、何のご用事だったんです？」

ブースの外では、秘書の志穂が待ち構えていた。

「何でもないよ。『怪獣が現れたみたいだけど、大丈夫か』って……」

「……本当に？」

伏し目がちにぼつりと志穂が問いを口にし、誠吾は苦笑した。

「おいおい、他人の目があるところで、困るよ」

「だって……」

一瞬、志穂の視線が第二秘書のそれから女のそれへと微妙に変化する。

周囲からの目を気にしながら、誠吾はすがりついてくる志穂の身体を自分から引き離した。

「本当に何でもないよ。さあ、秘書の仕事に戻ってくれ。口さがのない記者クラブの連中の目にも止まった日にはおおごとだ」

「……わかりました」

名残惜しげに去ってゆく志穂の後ろ姿と愁いのある妻の表情とがオーバーラップし、誠吾はやるせない気持ちになった。

シーン09

「無茶よ！ 腕だけじゃなく内臓も衰弱してるのに、安静にしてなきゃっ」

「放してくれっ。俺はいかなきゃ……、くっ！」

すがりつく陽子を引きはがして身体を起こそうとした和文は全身を走った激痛に顔をしかめた。それだけでなく、何か熱い塊が身体の内側からこみ上げてくる。

「かはっ！」

たまらず吐血した。和文の身体の前が鮮血の紅に染められる。

「きゃっ！」

悲鳴を上げながらも、そこは看護兵である。陽子は和文の身体につながったメディカル・メタポライザーのパラメータを確認して、即座にナースコールのボタンを押した。

和文の容態の変化は彼女一人で対応可能な範囲を越えていたのである。

『どうしたの？』

モニタースピーカーからの誰何に、絶叫する。

「二十七番のクランケが大量に血を吐いたんです。消化器系のどこかに出血があります。斉藤先生を早くっ！」

『わかりました。すぐ先生をお呼びします』

腹腔に腕を突っ込まれて中身を攪拌されるような激痛に身悶えながら、和文は思念を強くこらしていた。

“ベータマン！ ベータマン！ やつを、イルブロンを食い止めてくれ！”

シーン10

「お前さんが怪獣関連四法案のおかげでマスコミにかなり名を売ったのはわたしも承知してるさ。しかし、だからといって昔の同僚のわたしがお前の売名行為に協力しなければならない義理はなかろう？」

「おいおい、金城。“売名行為”までいうことはないだろう」

金城の言葉に、誠吾は苦笑した。

彼は本会議の審議再開のために、辛抱強い交渉を続けていた。

その間にも、都内を迷走して破壊の限りを尽くす怪獣イルブロンンの被害の続報は次々と議員控え室にたむろする議員たちの元へと届いていた。

「浦安の避難勧告対象地域が拡大されて、対象住民が十万人を超えたらしい」

「困ったな。千葉県西部はわたしの支持基盤なんだがな」

「工業地帯への被害が大きいようなら、今後の復旧計画に支障をきたすことになるぞ。自衛隊や防衛軍はいったい何をしてるんだ」

「またぞろ復興景気で建設族の狸どもが幅を利かせるのか。やれやれだな」

控え室のあちこちで、こんなささやき声が聞こえた。

やがて、

「おい、怪獣がこっちに向かっているらしいぞ。まもなく千代田区もイエローエリア（地域防災対策特別法に定められた要警戒区域）に入るらしい」

という情報が入った。

「ほお、珍しいな。怪獣どもは千代田のお城は避けて通るのが通例なのに」

「怪獣にも、たまには礼の心にかけて無礼なやつがいるらしい」

「“毎週金曜日には必ず怪獣が現れる”と言われた二十年前でも、そんな無礼なことをするやつは居ませんでしたぞ」

議員たちが皆好き勝手なことを言いながら、ぞろぞろと避難シェルターへと移動を始める。

一緒に席を立とうとした誠吾がふと動きを停めた。

それを見とがめた金城が尋ねた。

「どうした？ 岬」

一瞬、宙に視線を泳がせて、なにかに耳を傾けるような仕草をした誠吾は次の瞬間、何事もなかったように立ち上がっていた。

「お手洗いに寄ってくる。さきに行っておいてくれ」

「怪獣がすぐ来るぞ。早くしろよ」

「わかってる」

うわの空で答えながら、誠吾は一人でほかの議員たちとは違う出口から出ていった。

シーン11

「急いでください。早く！」

ヘルメットをかぶった国会職員にせかされて、志穂は書類ファイルを抱えて廊下を走っていた。

と、彼女は窓の外を見慣れたなにかが通り過ぎた気がした。

思わず立ち止まる。

「どうしたんです？」

職員の問いかけに、彼女は答えた。

「ちょっと、忘れものが……」

「この忙しいときに忘れものですか。命あつての物種ですよ」

明らかに年下とわかる若い職員の口調に嘲りを感じとって、志穂は反感を覚えた。

嘔みつくように言う。

「そうは言っても、わたしたちは国民の貴重な血税で働いているんです。書類一枚でも仕事の成果を無にするわけにはいきません！」

「わかりましたよ。一人で大丈夫ですね？ 満足に自分の身体すら動かさなくせに、日本の政治を思うままに動かしてやろうっていうわがままな年寄りの相手もしなきゃなんないんですけど」

国家公務員にしては辛辣な言葉を吐く若い男性職員に、志穂はついさっきの反感を忘れて、思わず微笑んでしまった。

「わかったわ。大丈夫よ。この書類をお願い」

抱えていたファイルを渡す。

「貴女みたいな美人のお相手の方がよっぽど楽しいんだけどなあ。それじゃ、さきにシェルターで待ってます」

走り去ってゆく職員の後ろ姿を見送って、志穂は苦笑した。

「この非常時に女性をナンパしようなんて、まったく最近の若い世代は怪獣慣れしてるわね」

それから彼女はさっき見たものの正体を確認するために、廊下を駆け戻った。

遠くから、ジェット戦闘機独特の甲高い音が聞こえ始めていた。鈍い爆発音なども遠く響いて来る。

怪獣が議事堂へと近づいているのはまちがいなさそうだ。

不安に駆られた志穂は足早に廊下から中庭へと抜けた。

シーン12

「先生！」

どこか視線を宙に漂わせたまま中庭を歩いていたのは、志穂が心配した通り、誠吾だった。

「こんなところで何をなさってるんです。早くシェルターへ避難なさってください」

「きみこそなぜ避難しない？」

駆け寄る志穂を、誠吾は信じられないものでも見るように見た。

「先生が歩いている姿をちらりと見かけたから、あわてて戻ってきたんです。さあ、一緒に行きましょう」

脚が不自由な誠吾のためにその腕を取ろうとした志穂を、誠吾はなぜか邪険に払いのけた。

「わたしのことは構うな。他人の心配をしている暇があったら、早く避難しろ！」

「構うなって……」

その誠吾の表情にふだんとは違う色を感じ取った志穂は強い調子で問いかけずにはいられなかった。

「本当に何をするつもりなんですか」

「何にもしないよ。控え室に忘れものをしていたのを思い出しただけだ。だから、きみも早く……」

「……うそ」

誠吾の意に反して、志穂はその場に立ち尽くしていた。

すがめた目で誠吾を見つめながら、低い声で問う。

「……さっきの、奥さんからの電話ね？」

言葉の意味がわからず、誠吾は困惑した。

「な、なんだ？ 突然。さっきの電話がどうしたって？」

「奥さんに、わたしとのことで問い詰められたんでしょう？ それで、あなたもわたしが傍にいるのが嫌になって、わたしと一緒にいるくらいなら、怪獣に踏み潰された方がマシだって思ったんだわ」

「な……、何をバカなことを……」

本来はインテリであるはずの志穂の突拍子もない発想に、誠吾は表情をひくつかせた。

「いいえ。きっとそうよ！ “こんなバツイチの小うるさい女につきまとわれるより、死んだ方がマシだ”って思ったんでしょう！」

みるみるうちに、志穂の瞳に涙の滴が盛り上がった。

次の瞬間、志穂は飛び込むようにして誠吾の胸へとすがりついていった。

その姿はもはや有能な議員秘書ではなく、恋に身を焦がす女のそれに違いなかった。

「でも、わたしは“あなたを奥さんから奪い取って、独占しよう”なんて思って、あなたに抱かれたわけじゃないわ。わたしはただ、あなたと一緒にいたいから、あなたといれば幸せな気持ちになれるから、だから、だから……」

志穂は誠吾の腕の中で、まるで少女のように泣きじゃくった。

「……志穂」

誠吾は自分の懐に飛び込んできた無防備な女の肩を壊れものを抱くようにそっと抱いた。

彼は、地球人としての岬誠吾をこの上なく愛してくれるこの女を、妻と同じくらいとおしく感じた。

妻のある身で、こんな風に他の女性と情を通じ合うことが社会通念上、許されないのは理解している。しかし、自分の腕の中で細い肩を震わせている志穂をいとおしく思う気持ちに嘘はなかった。

そして、誠吾はこの女を残して戦いへと赴かなければならない己れの運命を呪わしく思った。その上で、彼は彼女にすべてを打ち明けようと瞬時に決断した。

彼は言った。

「志穂。わたしの話を聞いてくれ」

「別れ話……なの？」

「いや、違う。きみに話しておかなければならないことがあるんだ」

誠吾の澄んだ目の色に、志穂は自分が相手の話を聞かなければならないことを悟った。

「……何？」

「わたしはこれから、きみを残して戦いにいかなければならない。この東京を、怪獣から守らなければならないんだ」

「どうして、あなたが？ あなたは国会議員で、今は自衛隊員でも地球防衛軍のS A T隊員でもないのに……」

「志穂。わたしは……」

そして、誠吾はその言葉を口にした。

「わたしは……超人ベータマンなんだ」

志穂の目が大きく見開かれた。

「……うそ」

呆然と漏らした志穂の言葉に、誠吾はゆっくり答えた。

「うそじゃない。わたしは八年前に左足をけがを負って、地球の守護者の座を後輩のラムダマンやイオタマンに任せてきた。でも、わたしは地球が……地球に暮らす人々が好きだった。だから、わたしは一人の地球人としてこの地球に残ったんだ」

誠吾の言葉がゆっくりと理解されてきて、志穂は呆然自失の状態にあった。

「八年前のけがって……怪獣サヴラヴドンの角に突かれたときのこと？ ベータマンの姿が確認されたのは、あれが最後のはずよ」

「そうだ。ビルの屋上に残り残された人々をかばうために、わたしはサヴラヴドンの角を左の腿に受けて、こんな脚になってしまったんだ。でも、どうしてきみがそんなことを覚えているんだ？」

「……あのとき」

志穂がぼつり、と言った。

「あのとき、逃げ遅れた人の中に、OLになったばかりのわたしもいたの。わたし、脚をかばいながら懸命に戦うベータマンの姿を間近から見上げてたの。“がんばれ！ ベータマン”って……。

あのベータマンがあなただったのね」

「そうか。あのときの一人がきみだったのか。言われるまで、気がつかなかったな」

そう言ってほほえむ誠吾の表情は、善行が発覚した不良少年のようなはにかみに満ちていた。と、表情を引き締める。

「でも、さっきテレパシーで連絡が入ってきた。今まで地球の安全を任せていたイオタマンが重傷を負ったんだ。あの怪獣を倒せるのは、今やわたししかいない！」

決然と言い放った後、誠吾は表情を崩した。

「だが、正直に言ってベータマンに変身したとしても、わたしが生還できる可能性は限りなく小さい。イルブロンは強く、そしてわたしは左脚にけがの後遺症を抱えている。そもそもわたしが後輩たちに座を譲ったのは、傷ついた身体が再度の変身に耐えられるかどうかわからなかったからだ」

「そんな……」

「だから……、恐らく二度と戻ってこれないから、このことを打ち明けたんだよ」

「……どうしても、いくの？」

志穂の問いに、誠吾は力強くうなずいた。

「ああ、怪獣が勝手に振る舞うのを許すことはできない。わたしはこの惑星に暮らすすべての人々が好きなんだ」

決意に輝く男の顔を間近から見上げた後、志穂はゆっくりその胸から離れた。

胸の中に渦巻く感情を抑えて、微笑みを作る。

彼女は言った。

「さよならは言わないわ。あなたが勝って、そして、生きて帰ってくるのを、わたしは待っています」

「ありがとう」

同じく微笑みを返すと、誠吾は自分の背広のポケットから細いブレスレットを取り出した。いつも肌身から離さなかったそれ……スパーク・レットを右の手首に巻く。

八年ぶりに着けたそれは、かつてと同じようにびたりと元の場所に納まった。

八年ぶりに現役復帰した四十四歳のヒーローは右手を高く掲げ、そして、叫んだ。

「ベータ・スパーク！」

閃光が走った。

シーン13

分厚い装甲の内側から炎が噴き出した。

最新の材料科学を動員してつくられた装甲と、レアメタルの塊とってよい電子機器とが光熱にあぶられる。

それきり、自重八十トン近い二二式メーザー殺獣戦車は完全に沈黙した。

援護にまわっていた陸自の〇九式戦車三十両も、とうの昔にスクラップと化している。

千代田のお城を目前にして、もはや怪獣イルブロンの前に立ちふさがる地球人の戦力は壊滅状態と言ってよかった。

「くそうっ！ このままやつが思うままに東京を蹂躪するのを、指をくわえて見ていろってのか！」

SAT副隊長である加納規久は思わず叫んだ。

東京上空には、すでに彼の操るAK-47一機しか軍用機の姿はなかった。

サラマンダー焼夷ロケット弾を抱え込んだ対地攻撃ヘリコプターAH-101《モヒカン》ですら、一機残らずたたき落とされていたのである。

「この機体にも、ろくに弾薬は残っちゃいない。あとは俺も黙って墜とされるのを待つばかりかよ」

言いながら、規久は無意識に首から下げた銀のロケットを左手でまさぐった。

その中には、愛妻・久美の写真が納められていた。四十歳近くになってやっともらった十一歳も年下の妻である。

「新婚半年で未亡人にしちまって、ごめんな」

一瞬目を閉じて呟いた後、規久がスティックを大きくひねろうとした、まさにとき。

イルブロンの目の前にまばゆいばかりの閃光が生じた。

閃光はたちまち人の形となり、怪獣の前に立ちふさがった。

身長四十メートル、体重二万五千トン。燃えるような深紅に身を包んだ巨人である。

「ベータマン！」

規久はその巨人の名前を知っていた。

シーン14

「きしゃーっ！」

イルブロンの中の首がハモって威嚇のうなり声を上げた。

この巨大な怪獣は破壊力こそ強大だが、知能と呼べるほどのものはほとんど持ち合わせていないのである。

怪獣保護活動家たちの熱い想いはともかく、怪獣と呼ばれる巨大生物の大半が有意な知能を有していないことは過去の事例からはっきりしていた。その行動原理はほとんど本能的な反射のみと言ってよい。

ベータマンはその蛇に似た首にチョップをたたき込んだ。

鈍い音を立てて、イルブロンの中の首がしなった。

続けて、手刀による斬撃を繰り返す。

さすがの怪獣が思わず怯んだとき、ベータマンの身体が流麗にしまった。

見事な後ろ回し蹴りが繰り出される。

筋肉の引きちぎれる音が響いた。

イルブロンの中の真ん中の首が宙に舞った。

刃物で断ち切ったような切断面から緑色の体液と白煙とが舞い上がった。

体組織を自身の溶解液に腐食されたのである。

テストドロン型怪獣は成分の異なる二種類の体液を頭部先端の耐蝕嚢内部で化学反応させて、生成された溶解液を霧状に噴射する。

その耐蝕嚢を納めた頭部を弾き飛ばされ、本来ありえない部位で溶解液が反応生成されて、自分自身の肉が灼かれたのである。

生まれて初めて味わう激痛に、イルブロンは猛り狂った。

「ぎゃしゃー——っ！」

ベータマンに蹴り飛ばされ、宙に大きく弧を描いた頭部が落下した音が響く。

それと時をほぼ同じくして、イルブロンは狂ったごとく地面を前足で蹴った。三万トンもある巨体そのものをベータマンへと浴びせかける。

しかし、その瞬間、ベータマンは敵のその動きに自分のタイミングを合わせていた。自分から後ろに倒れ込みながら、相手の身体の下に入り込む。

ベータマンの足底がイルブロンの腹部に当てられたと見えた瞬間！

三万トンの巨体が宙を舞っていた。

見事な巴投げである。

大きな地響きを立てて、怪獣は無様に転がった。

その巨体の直撃を受けたビルが無惨に崩れ落ちる。

確かにこの状況で被害は些少ではないだろう。

しかし、それでもそれは怪獣に思うままに振る舞われるよりは小さいはずだった。爆弾やレーザー光線による戦闘で被る被害よりも、流れ弾がない分、格闘の方が少なくて済むだろう。

ベータマンはこのまま一気に肉弾戦で決着をつけるべく、腹を上に向けてジタバタ暴れる怪獣

へと躍りかかろうとした。

そのとき。

地面すれすれから伸び上がるようにして、イルブロン長い首がベータマンを側方から襲った。

そして、それが偶然にベータマンの左足をヒットした。

ベータマンの姿勢が不自然に崩れた。彼はたたらを踏む格好になって、イルブロン目の前に転がってしまった。

起き上がってきたイルブロンがその背中を踏みつけた。

三万トンの体重をまともに受けたベータマンの背中が大きくしなった。

本能的な破壊衝動に行動様式を支配されたイルブロンは遠慮会釈なく、何度もベータマンを打ちすえた。

シーン15

「どうした！ ベータマン。そんなやつに負けるな！」

上空を旋回するAK-47のコクピットで、規久は声が枯れんばかりに声援を送り続けていた。

そして、彼は八年前のことを、まるでついさっきのこのように鮮やかに思い出していた。まだ駆け出しのSAT隊員であった彼は当時も今と同じようにベータマンに声援を送っていた。

そして、やはり今と同じようにベータマンは勇敢に怪獣と戦っていた。

「なんてこった。ベータマンは昔と変わっちゃいないのに、俺は副隊長なんて肩書きの上にあぐらをかいて、昔の情熱を失っちゃってるじゃねえか。嫁さんのことをぐじゃぐじゃ考えて、おたついちまってよ。こんなじゃ、ベータマンに顔向けできねえぜ！ 考えろ！ 今の俺にできることはなんだ？」

叫ぶと同時に、規久はAK-47の機体を大きくバンクさせた。

ミサイル、電磁レールガンはもちろん、三十ミリバルカン砲の弾薬すら撃ち尽くした機体の兵装状況を再確認する。

「畜生。潤沢に残ってるのは推進剤くらいか」

その瞬間、規久の脳裏を閃きが走った。同時に、彼は機体を推進する熱核反応炉をロックしていた。

水素燃料系の hidro サイクル・エンジンに推進系統が切り替わったのを確認して、機首をいまだベータマンを打ちすえ続けているイルブロンに向ける。

それから、規久は地球防衛軍司令部への通信回線をつないだ。

「司令部。こちらキング1、加納だ。状況はモニターしてるな？ ベータマンを援護してやりたいが、こちとらバルカンの弾一発すら残っちゃいねえ。そこで、だ。これから、この機体でカミカゼ・アタックをかける」

『加納二佐！ それは無茶です！』

スピーカーから聞こえてくる通信兵の絶叫に、規久は唇の端を歪めて笑った。

「無茶は承知の上だよ。一機二十億もするナイトホークがもったいない気もするが、なァに、都民一千万の命と比べりゃ、安いもんだ。俺とベータマンの幸運を祈っていてくれ。以上、通信を終わる」

一方的に言いたいことだけを言って、規久は通信を切った。

「さァて、水素重水素併せて、可燃性の燃料だけならまだた一んとあるぜ」

舌で唇を湿しながら、規久はひとりごちた。

「見てろよ、ベータマン。あんたを助け、化け物をやっつけ、そして、しっかり俺も生き残ってやる。人間も少しは大人になるってところを見せてやるぜ！」

シーン16

体内時計が警報を発した。

朦朧とした意識の中で、ベータマンは己れがあらゆる意味で危機的状況下にあることを認識していた。

左足のけがのことや、今こうしてイルブロンから被っている物理的なダメージのことはもちろん、タイムリミットが迫っていることをである。

実は、ベータマンが身長四十メートルの巨人の姿で存在できるのは約三分の間だけなのだった。燐酸の化学反応によって生命活動を営む地球の生物と異なり、巨人となったベータマンはスペリウムと呼ばれる地球人には未知の元素をそのエネルギー源にしていた。

そして、そのスペリウムは極めて特異な性質を持った放射性元素だった。

いや、そもそもそれは地球人の言う放射性元素に分類していいものなのかすら疑問の物質であった。スペリウムはアルファ線もベータ線もガンマ線も放射しないのである。

スペリウムが放射するのはタキオン線.....光より早く伝播する超エネルギー波だった。

タキオン線に被爆した物体は本来光速度を基準とした物理法則で記述されるはずの因果律を破壊される。光速度によって保証される“時空の同時性”が壊れ、結果が原因よりも先に現れて、時空間の物理的特性が変質するのである。

すなわち、スペリウムをエネルギーとするベータマンが長時間地上に存在することは地球上の物理法則を破壊することを意味した。本来、時空間には生じた歪みを自律的に回復する補償効果と呼ばれる特性があるが、それにも限界がある。その“時空の補償効果”によってすら時空の歪みが修復不可能になるタイムリミットがすぐそこにまで迫っていた。

ベータマンはあらん限りの力を振り絞って、自分の身体を押しえつけているイルブロンの呪縛から逃れようと抗った。

シーン17

爆発は突然だった。

傷ついていたイルブロン我真ん中の首にAK-47が突っ込み、粉々に爆散したのである。

イルブロンは文字通り火だるまとなって、吹き飛んだ。二十トンに近い液体水素燃料の爆発は核爆弾にこそ劣るが、三万トンの巨体を吹き飛ばすには十分な威力を持っていた。

殴打の連続から解放され、首を振りながら起き上がったベータマンは目の前をふらふら降下してゆくパラシュートに気がついた。

自機を液体水素満載のミサイルとして誘導操縦したAK-47のパイロットが衝突寸前に射出座席を作動させてバイルアウトしたのだ。

相手はこちらの正体に気づいていないだろうが、ベータマンの方はパラシュートにぶら下がっているのが誰なのかははっきりわかった。

加納規久は元SAT隊員・岬誠吾にとって三年後輩になるのである。

ベータマンは規久の見事な有人ピンポイント誘導に敬意を表して、右手の親指を立てて見せた。

規久も同じサムアップで応える。

その元気な姿を確かめて、ベータマンはイルブロンを振り返った。

十トンを越える液体水素燃料の爆発に巻き込まれたにも関わらず、怪獣は大したダメージもなく、もそもそと起き上がろうとしていた。

もう時間がない。

ベータマンは両腕を左右に広げ、両手の先端にスペリウムから抽出したタキオンエネルギーを凝集させた。十分にエネルギー準位を高めたところで一気に両手を交差させ、スパークさせる。

虹色の雷光が怪獣へと走った。

スペリウムの性質を逆手にとった必殺技、相手をその属する時空間ごと破壊するスペリウム光線である。

質量三万トンを越えるイルブロン巨体が閃光に包まれ、信じられないほどに振動した。

次の瞬間！

因果律を破壊されたその体組織が粉々の塵となって爆散した。

イルブロンが消滅した後も、それが存在していた空間は陽炎のように不安定に揺らめいていた。

脅威が完全に去ったのを確認してから、ベータマンはゆっくりと腕の交差を解いた。

それから、彼は空を見上げた。

彼はそのときはじめて今日が抜けるような晴天であったことに気づいたように、両手を上に向けた。

二万五千トンの巨体が質量を失ったように宙に浮いた。ベータマンは意志の力で重力を制御し、空を飛ぶことができるのだ。

最初目に見えないほどだった上昇速度が幾何級数的に増大してゆき、たちまちその姿は雲一つない青空へと消えていった。

シーン18

志穂は両手を胸の前で組んだまま、祈るようにベータマンの姿が消えていった空を見上げていた。

と、その身体が電撃を受けたように震えた。

ゆっくりと、そう、本当にゆっくりと視線を地上へと下ろしてゆく。

やがて、彼女は議事堂中庭に一人立つ自分へと歩いてくる人影を認めた。

人影は左足を痛めているらしく、何度かふらつきながら、それでも倒れることなく志穂の方へと歩を進めていた。

まもなく、人影……岬誠吾は志穂の前に立った。

志穂と誠吾はお互いに無言のまま、しばしお互いの表情を見つめ合った。

最初に口を開いたのは、志穂だった。

彼女は言った。

「……お帰りなさい」

「ただいま」

誠吾が見せた笑顔は今まで志穂が見た中でも一番疲れ、やつれ、でも、最高に優しい笑顔だった。

「誠吾さんっ！」

感極まった志穂が誠吾の胸にすがりつき、その肩を誠吾の腕が抱き締めたのは同時だった。

シーン19

「よお、星野。けがの具合はどうだ？」

「あ、副隊長」

青木が原の樹海を切り開いて作られた地球防衛軍富士基地。

イルブロンの騒動から三日後、その附属病院の病室で星野和文はS A T副隊長加納規久の見舞いを受けた。

「内臓の方の調子はぼちぼち戻ってきてます。問題は右腕ですが、なーに、まだ若いですからね。クローン培養した筋組織を自家移植してもらえるように申請を出してますし、絶対にS A Tに現役復帰してみせます」

ベッドの上で包帯の巻かれた右腕をたたいてみせる和文に、規久は苦笑した。パイプ椅子に腰を下ろしながら、冷やかすように言う。

「そんだけ吹けるようなら、心配いらねえな。でも、あんまり無茶をするんじゃないぞ。今度のこと、洋子ちゃんをずいぶん泣かしたそうじゃねえか」

「無茶という点では、副隊長にどーのこーの言われる筋合いはありませんよ。奥さんがかなりお冠だったそうじゃないですか。『神風特攻なんてとんでもない！』とか」

「ったくぎゃーぴーうるせえ女だよ。かなわねえ」

部下からの指摘に、そううそぶいてみせる。

「そのぎゃーぴーうるせえ女の写真を肌身離さず持ち歩いているのはどこのどなたです？」

「うるせい！」

ひとしきり笑った後、規久はふとまじめな表情に戻った。

「しかし……な」

「しかし、なんです？」

和文の追求に、規久は視線を病室の窓から、外の鮮やかな緑に転じた。

「今度のことじゃ、ベータマンにいろんなことを教わったよ。いつも戦う姿勢を失っちゃいけねえ、とかな」

「副隊長なら、きっと大丈夫です。いつでもベータマンに負けない戦士ですから」

「そのベータマンなんだがな」

「はい？」

再度視線を転じた規久に真っ正面から見つめられ、和文はどぎまぎした。

「どうして、今回はベータマンだったんだろう？ なぜイオタマンが現れなかったんだ？」

「さ、さあ……」

規久の当然の質問に、和文は表情のひくつきを隠すのに苦労しなければならなかった。

シーン20

「かわいい怪獣たちを殺すなァっ！」

「地球防衛軍の駐留は憲法違反だァっ！」

「怪獣たちとわれわれの生活を脅かす怪獣関連四法案、断固粉碎っ！」

「おーっ！」

相も変わらず機動隊と押し問答を繰り返しているデモの行列を見て、誠吾は単なる嘆息と表現するのははばかれる息を漏らした。

「……まったくあいつらには『学習する』という概念がないのか？ あれだけイルブロンに町を派手に壊されていながら、いまさら『かわいい怪獣を殺すな』だと？ 今回のことで家族を殺されたり、生活の糧を失ったりした人たちのことを考えたことがあるとはとても思えないな」

「そんな地球人には愛想がつかしました？」

隣りに座った志穂に表情をのぞき込まれ、誠吾はどぎまぎした。

「な、何をばかなことを言っているんだ、きみは」

二人を後席に乗せたトコタ・ミレニウムセダンは例によって交通規制で渋滞した道路をのろのろと国会議事堂へと進んでいた。

イルブロンの襲来によって中断していた与野党間交渉がようやく前進を見せ、本会議の再開が決まったのである。

「とにかく、だ」

志穂のにやにや笑いに耐えられないように、誠吾は無理矢理話題を変えた。

「今国会では、何がなんでもわたしが原案作りに参画した“怪獣関連四法案”を本会議で通過させなければならんだ。そのために、経済通の黒岩先生に仲介してもらって、経済関連四団体に協力をとりつけたんだからな。確かに、怪獣と見れば無条件に駆逐してしまおうという発想は危険だが、かといって、その連中の主張している無条件の怪獣保護ってのも大いに問題だよ」

「はいはい。わかっています」

誠吾の言葉に、志穂は『あなたの思っていることはすべてお見通しですよ』とでも言いたげに微笑んでいるだけだった。

誠吾はそんな志穂の様子に、『秘密をすべて話すのではなかった』という後悔の念と同時に、安堵の情も覚えていた。少なくとも、彼はすべてを自分一人で抱え込む必要はもうないのだ。

車がようやく議事堂の車寄せに到着した。

これから踏み出す一步が、国会議員・岬誠吾としての戦闘開始を意味する。

「よしっ！」

誠吾は自分自身に気合いをかけ、シートから立ち上がった。

自分は巨大な怪獣すら倒す超人なのだ。たかが人間などに負けるわけがない。

ドアを開けると同時に、殺到した政治記者のカメラフラッシュと質問の嵐が誠吾を歓迎した。

「岬さん！」

「岬先生！ 今国会での怪獣関連四法案通過に関する目論見はどの程度でしょうか？」

「野党連合は法案の断固粉碎を宣言していますが、そのことに関する先生のご意見を……」

「今後の審議の予定について……」

「民自の金城さんと非公式協議の場を持たれたという情報がありますが、この件について……」

「岬先生！ 教えてください！」

プレスの腕章をつけた報道関係者とSP警官とにもみくちゃにされながら、誠吾は大理石の階段を上っていった。

「怪獣関連四法案の審議日程については、わたしの口からどうこう言える問題じゃない。民自の金城先生を始めとする野党の方々の反応に関しては、ノーコメントだ」

誠吾が群がる群衆をかき分けて、階段の半ばまできたとき。

「……岬誠吾」

敬称抜きの名前が彼の耳へささやかれた。

誠吾の足が停まった。

彼の目の前には、報道関係者にしては眼光の鋭すぎる男が一人立ち塞がっていた。自分の肩を押し当てるようにして、誠吾の身体へ密着している。

「地球防衛軍隊員として何十もの無辜の命を奪っておきながら、まだ殺生が足りないか。貴様のごとき鬼畜に等しい輩は必ず天誅を受けるのだ！」

叫ぶように言うと、男は誠吾の腹腔に深く突き通していた短刀を勢いよく横に引いた。

腹筋と腹膜、そして腸や肝臓が切り裂かれる恐ろしい音が響き、男と誠吾の背広を汚しておびただしい量の鮮血がほとばしった。

あれほど騒がしかった議事堂車寄せ近くの階段に、気味が悪いほどの沈黙が落ちた。

転瞬、

「い……嫌ァ————っ！」

誠吾のすぐ後ろにいた志穂の喉から絹を引き裂くような悲鳴が溢れた。

「ひ、人殺シィ！」

「暗殺だあっ！」

同時に、呪縛から解き放たれたように記者とSPとからなる群衆が雪崩を打って階段を駆け落ちた。

驚愕と恐怖の視線を集めて、偽装新聞記者の仮面をかなぐり捨てた暗殺者が高らかに宣言した。

「この無知蒙昧たる国賊は神の獣たる巨大な生き物たちを数多く殺し、今また、より多くの神獣たちを屠殺しようと邪悪なる謀略を進めていた。天の正しい道信じ、すべての生命の平等を信じるわれわれはこやつのような輩の存在を許してはならない。よって、わたしが天に代わって、この愚かな天の敵を成敗したのだ。わたしの崇高な行為によってこの国は真実に目覚め、また一歩神の国へと近づくことだろう！」

血にまみれた短刀を握り締めて、陶然とした目で宙を見つめるその様はとても常人とは思えなかった。

「た、逮捕しろっ！」

「逃がすな！」

「すごいぞ。こいつァ特ダネだっ！」

ついさっきまでの凍り付いたような沈黙から一転、騒然とする場の中央で、志穂は階段に崩折れた誠吾の身体を抱き起こしていた。

「先生！ 誠吾さん！」

志穂の膝の上で、誠吾の瞳は急速にガラス玉のように輝きを失いつつあった。

「誠吾さん！ 死んじゃ嫌ァ！ せっかく生きて帰ってきてくれたのに、そんな……。ひどい！ 死なないでっ！」

しかし、そんな志穂の悲痛な叫びも、急激な失血によるショック症状に陥った誠吾の耳には届いていなかった。

彼の青ざめた唇から漏れた最期の言葉は、

「……なぜ、なぜだ？……」

だった。

《完》